
Old fashion

小坂戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Old fashion

【Nコード】

N7731G

【作者名】

小坂戒

【あらすじ】

十九世紀英国を舞台に凡人が繰り広げる革命の時代の大活劇。

母

綺麗な紅い絨毯を初めて踏んだときの気持ちは忘れられるものではない。

キール伯爵夫人の誕生日に催されたパーティー兼舞踏会に私と母は招かれた。

貴族のパーティーであるからにはそれは上等な招待状を持参しなくてはならないもので、当然母も花の香りのする手触りの良さそうな手紙を持っていた。

しかし、言わば小金持ち程度の母が産業革命の最中、中流階級の突き上げをむしろ利用して更なる発展を臨むキール伯爵家の身内の誰が母と私を招待したのかという疑問を幼い私は思い付きもしなかったらしい。

それには子供らしい理由がある。

当時の私は母のことを貴族か何かだと思い違いをしていたのだ。

週の内、二日は華やかな服に上等な靴、時には日傘すらさして、ほのかに香水を振りまいて出掛けて行く母は子供にとっては貴婦人以外の何者でもなかったのである。

その日、母と共に鉄道に乗り込み、馬車を使って館の前に辿り着いた時、仕立ての良い服を着ていた御者が母に金銭を要求しなかった事、あるいは開け放たれた扉から執事らしき人物が客人を招き入れる、腰をややかがめ、奥の手を広間に向けたという所作によって私は母が貴婦人であるらしいという考えを確かにした。

広間には大量の燭台が置かれ、その後方、あるいはシャンデリアの上方には同じ光が全く同じに映し出され、見つめ合って踊り合う人達の像をばやけさせていた。

蛾のにおいに混じってたかれた香が空気を甘いものにしたので、私は酔いを覚え手近にあった長椅子に座り込み、直ぐに眠ってしまった。

った。

私を起こすまでの間、すぐ近くにいなかった母が何をしていたのかは良く分からない。

ただ、母の洒落た香りが少しくすんでいた気がした。

館から出してもらった馬車に乗り、駅から鉄道、それから家路に付くまでの間、母と私はずっと手を繋いでいた。

母が言うところの貴族の子弟は母親とくっついていたりしないものだったらしい。

「だから、今日は手を繋いではいけないのよ」

母は同じ言葉をそっくり二度も繰り返した。

子供の私にとっても少女のようだった母にとって長い間近しい人間と触れ合えないでいることは少なからず寂しいものであったろう。そう思えば、出来るだけ長く、多く、深く人とつながっていたいと強く願う母は貴族になど成り得ない。

それを薄ぼんやりと理解した結果、舞踏会の夜以降、私は母からのおやすみのキスを拒む事が無くなった。

チャリング・クロス

人生が与うるものの全てがある街、ロンドンは人間の存在の満ち干きが全てであるという場所、チャリング・クロス。

駅前には鉄道の分岐点、エレアノールの十字架を臨むことができるしかし、今や英国中に張り巡らされようとする鉄道の分岐点がエレアノールだというのは誰の考えなのだろうか。

恋多き女性が発展していくものの母であるという意味なら、非常に興味深い。

昨日、届いた手紙にはこの駅でちょうど昼頃に迎えに上がるとあった。

向かう先を詳しく書いてあればオムニバスにでも乗り込んだものだが、待っていないといけないというようだ。

左手でトランクを軽く叩くと、中から低く長い威嚇の声が聞こえた。

おそらく列車が此処に着いた時に知らせる事もなく横向きに寝かせていたトランクを持ち上げた事に立腹なのだろう。

バシレウスが不機嫌な時はそっとしておくに限る。

下手に構って刺されてしまつては楽しくない事この上ない。

新調するつもりで眼鏡を置いてきてしまったが、装飾、性能共に揃っている物がこのロンドンですら存在しているか危うい。

駅前でこれから必要な物や失くしてしまった物をつらつらと思いつかべていると、バシレウスが再び暴れだすのを右手で感じた。

窘めようと右手のトランクを視界に捉えると、その中にちらりと馬車が見えたような気がした。

私が目線を上に上げると、馬車の横に立っていた上級執事と見える人物が深々と頭を下げる。

綺麗に曲がついていく腰を見据えながらそちらに足を運び、声が震

えないようにゆっくりと告げる。

「初めまして、ネッド・ラッドです。どうぞ、よろしく」

黒髪を全体的に横に流した不思議な髪型の老執事は私の右手から滑らかな手つきでトランクを預かるという仕草を示しながら、容貌に相応しい穏やかな声で答えた。

「キール伯爵の使いの者でございます。主人の滞在しているホテルまでご案内申し上げるようにつけられております。何なりとお命じくださいませ」

そう言つと、馬車の扉を開けて、私の手からトランクを受け取る。馬車の中には何かの臭いを抑えるために、席の奥には台座と輪切りのレモンが載った皿が置いてあった。

奇妙な趣向に変な気になりつつも、黒い布張りの席に腰を下ろす。老執事は馬丁に二言、三言声をかけると顔を覗かせて、告げる。

「こちらよりロンドン塔の方へ馬車を動かします。用がございましたら、お声掛けください。少しの間でございますがテムズ河の景色を楽しむことを出来る事かと存じます」

前々から、トマス・クロムウェルとトマス・モアが死んだ場所には一度訪れてみたいと思っていた。

彼らの王、ヘンリー八世は堂々とした体格の王であつたが、伯爵はどうであるのか。

右側の窓にテムズ河が映り、羽を乾かしている鳥が見えた。

凍えてしまわねばよいのだろうけれども。

場違い

馬車はテムズ川沿いをロンドン塔へむけてのんびりと進み、セントポール大聖堂を左に臨む辺りで左に折れた。

そのまま真っ直ぐセントポール大聖堂を左側に捉えながら、バーソロミュー病院を少し過ぎた辺りで止まる。

短い遊覧の間、私は馬車の中が不思議に暖か事に感心し、レモンの輪切りの幅が均整な事に感嘆を憶え、セントポール大聖堂には正方形の棺桶に眠る女王と隻腕隻眼の提督の遺体が眠っているのだと思いついていた。

あのような立派な場所で眠ることが出来れば運命の日まで過ごす事も出来るのかもしれない。

本人達にとつてはもう関係がないのかもしれないが。

車輪のからからという音が小さくなり、左側の敷石に寄っていく。窓からその家屋をのぞいてみると、看板は無いものの、その大きさから持ち主が相当な資産家であることを窺わせる造りであった。

さらに往来に馬車を寄せるためだけの空間を設けていることも考えると、この家屋がキール伯爵の所有物であるかもしれない。

この家屋の内装と奥行きを予想していると、馬車の扉が開き、老執事が姿を見せる。

馬車を降りてから扉まで、賞賛したくなるほどの気を回し様を演じながら執事は右手にトランクを持ちつつ、左手で両開きの扉をノックする。

すると、中から年若いこれも執事らしき人物が中から扉を開けて、私たちを招き入れた。

入ってすぐの玄関兼ロビーは私の家の主寝室よりまだ大きく、敷かれている絨毯には皺も染みも見られない。

若い方の執事は私の外套を預かるや、すぐに見えなくなり、私は

老執事の案内で玄関から延びている赤い絨毯が敷かれた螺旋階段を上る。

手すりにまで装飾が施されている見事な物で、曇り一つ見られないのは先ほどの若い執事が手入れを怠っていないからなのだろう。

「伯爵は二階の喫茶室でお話がしたいと申しております。よろしいでしょうか？」

承諾の返事をする、老執事は私の様子をそれとなく気遣いながら階段を上ってすぐ左に折れ、二階廊下の真ん中辺りの扉の前で止まる。

姿勢を正し、老執事はコンコンと綺麗な音をさせて扉を叩く。

「ラッド様をお連れいたしました」

「入っていただきなさい」

案に相違して高い声が漏れ聞こえた。

老執事が空いている左手でノブを回し、扉を抑えたまま脇に寄る。扉からはまずは光が漏れ出てきた。

部屋一面が見渡せるほど扉が開くと、目が慣れてきたのでその部屋にある雑多な調度品を眺める事ができた。

部屋の一面を占めると言っても良いほどの大きい窓からの光は部屋中を隈なく照らし、その為に部屋は廊下よりも明るい状態であったのだ。

さて、幸か不幸かは分からないが、慇懃な挨拶をして、少しでも好かれねばならない状況であるのに、キール伯爵の見事な髭を見ることでやっと只一人の同居人の存在を思い出した。

「初めまして、どうぞよろしく願います」

それだけを出来るだけ早く言い終わると、伯爵の会釈を確認する間も無く身体を曲げて背後を見つめ、老執事が持っているトランクを凝視した。

振り向く動作が行われるかどうかの時にはもう私の耳に低い唸り声が聞こえ、そのすぐ後には甲高い鳴き声が響くことになる。

それもトランクの内部をガリガリと削る音と一緒に。

厳かな打ち明け話

アリックスを収めるにはたった一語で足りた。

完全に大人しくなるのを見届けて、老執事にトランクを降ろしてくるよう頼み、そうしてやっと振り返って伯爵の姿をしっかりと認めることが出来た。

私の母は濡れ羽色の髪で黒い目の健康な細身の殿方が好きであったと記憶しているが、そうになると眼前の伯爵の容姿に疑問を感じてしまう。

ジェームズ・キール伯爵は灰色がかった金髪に碧眼、体格はお世辞にも細身とは言えない方であった。

母が冗談で言っていたのを思い出す。

私の父は黒猫で、母の愛人は紳士だと。

眼前の貴族はどちらにもあてはまりそうにない。

「失礼をお許し下さい、伯爵。私はネッド・ラッドと申します。

ご拝謁の栄に浴することが叶い恐悦至極にございます」

伯爵の足元にほんの少し跪きつつゆっくりと言葉を出す。

貴族に対する礼儀は全く教えてもらえなかったことが、少しだけ悔やまれる。

「構わんよ。それに私室ではあまり固くならないでいただきたいものだ。」

貴族らしい態度が鼻につかないというのは、生まれによるものなのかそれとも衣服がそうさせるのかは分かりかねるが、私は伯爵の鷹揚な態度に納得してしまった。

「私にお話ということでしたが、伯爵はもちろん、伯爵の眷族方にご友人をもつと憶えはございません。どうか、私の不安をお取り除きくださいませか？」

相手を貴族であると認めた以上、それなりの態度で接する。

さて、足りないよりも芝居ががつていようと多少大袈裟なほうが大概の相手は満足するはずだが。

すると、ずっと跪いていた事に今更気づいたように伯爵が椅子を勧める。

ゆつくりと見てみると、その椅子の真紅色の革張りがされ、黒炭色のもで組まれたセンスも悪いものではない。

「まずは、そちらに君の母親に要求された額の小切手は置いておく」

窓際におかれた机を指しながら伯爵が告げる。

「こちらが本題だが、今からする話を受けるかどうかは任意だ。ただ、継続的な報酬を軽視する年齢ではもう、ないだろう？」

伯爵がちらりとこちらを窺いつつも、話を続けていく。

このような話は聞いてしまつて良い事がないと決まっているようなものだ。

なので、早めに小切手に書かれた金額を確認して去ってしまいたいものだが、それは余りにも無礼な行為ではある。

「君の母親が我が家に連れ込んだ娘の付き人になつてもらう。そもそも君はキール伯爵家に感謝を捧げる義務があるのだ。君の妹にこれまでも、気分の悪い事にこれからも世話をしていくのだからね」
思いもしなかった言葉が出たものだ。

そうか、母にはいつの間にもやら娘がいたのか。

女の子が欲しいという母のかつての口癖が6年前にぱつたりと消えた理由を他人に聞かされるとは思つてもみなかった。

「勿論、報酬は払う、エミリーは立派なキール家の一員なのでね。君の母親からも頼まれた、君を形ばかりでも我が家の一員にして欲しいのだと」

今までついぞ知る事のなかった妹の存在、キール伯爵家の一員というブランド、それに未だ知らざる母親の秘密に近づけることに、魅力を感じない事はない。

しかし、その前に今は先立つものをいただいておかないといけな

い。

立ち上がり、窓際の机の上の紙をじっと見つめる。

この額ならば5年はそれなりに生きていけるといった辺りであるうか。

贅沢に暮らしたとすれば1年でなくなる事も否定は出来ない。

伯爵の眼前に立ち、落ち着いた声を意識する。

「喜んでお請け致します。数々のご無礼をお許しください、伯爵」
言葉の間、深く腰を曲げてはいたが、跪くことはしなかった。

s t r a n g e

「なあ、君。遠くない先に此処で帽子をかぶった熊が見つかるかもしれないよ。それまで生きていられないのが少しだけ残念になってくるじゃないか」

出会って間も無くのその言葉が余りに奇異なものであった為、私は暗闇の中で輝く両眸をただ眺める事になった。

伯爵との会見が終わると休憩の部屋に通される事もなく、再び馬車に乗り込むこととなった。

ロンドンに夕暮れが降りてきて、ほんの少し感じるほどであった寒さも厳しいものになっていく。

馬車の中でアリックスを外に出してやると珍しく膝の上に乗ったまま横になってしまった。

此処は前の場所より暖かいからだろうか。

それとも、気儘な猫にも住み慣れた場所というものがあって、そこから離れさせられるのは寂しいものなのか。

伯爵の私邸のある横町から大通りに入る以外に道を折れることもなく、ゆっくりと町並みを見物する事ができた。

さすがに今の時代のロンドンに版築はもう存在していないようで、大通りに面した建物は軒並み小奇麗であった。

もつとも安い鉄屑や軟な木材で組まれている家をこの通りからは見ることができなかっただろうけれども。

1年前のコレラによってこの都市のボロ屋に住む人が1万人以上も死んだらしい。

ハイドパークを左手に見ながらしばらく進み、やがて右に曲がる。さらに揺られていると、曲がってそれほど経たない内に馬車が止まった。

扉が開けられ執事にお降りくださいと促されるままに歩道に足を下ろす。

そこは交差点の手前で、すぐ側には通りでよく見かけた一色でベタ塗りをしたような味気ないものではない、煉瓦でしつかりと組まれた家が構えていた。

「少しお待ちいただけますでしょうか？もう少しで戻られるはずですので」

そう言ったものの、老執事はそこから動く事もなく、かといって何を言うでもなく立ち尽くしていた。

この老執事の特徴は自分で言う事を決めたら、それ以外の言葉を口にしないというものであるかもしれない。

なので、誰が戻るのかを聞くこともなくアリックスを脇に抱えたまま冷え冷えとする夜に立ち尽くすことになった。

欠伸のような声をアリックスが何度か漏らす頃に、やっと家の中から物音が聞こえた。

規則的な足音だけが聞こえる中で、目の前の扉がそっと開き、男性らしき影が現れてこちらに一瞥をくれつつ、後ろ手で扉を閉める。ちらと横を見やつても、老執事には何の動きも見られない。

きつと暗くなるであろう夜にきな臭い人物が目の前に近づいてくる、この状況に彼は慣れ切っているというのだろうか。

足音高く近づいてくる人物の風貌は、髪が長く、手足が細く、肌が異様に白かった。

その血色の悪さは貧民を思わせ、また、唇の形が高貴さを思い出させる。

貴人であれば失礼だが、この人物は途轍もなく変な雰囲気を持っている。

正しく異邦人である。

愚かであれ少女たれ

驚いたことがある。

件の異邦人が初めて言葉を発するとすぐに、今まで微動だにしなかった老執事が口を開いたことにだ。

「お疲れ様でした、お嬢様。お客様はお休みになつておられますか？」

詳しい説明が無いままに此処に連れて来られて、今の今までだ突っ立っていただけの私にはこの発言を全て理解する事はできない。ただ、その中でもほんの少しだけ納得できたこともある。

この異邦人の性別を無意識に男性と考えていたからこそ違和感を感じ続けてきたのであつて、なるほど女性であれば違和感が少しだけ消える。

女性の異邦人は老執事に一瞥もくれずに直線で歩いてくると、そのまま馬車に乗り込んだ。

4人乗りの馬車であるので私が乗ることも出来るのだが、少しの逡巡の後に私は後ろの御者席へと足を向けた。

その時、無視されてもへこたれる事の無い健気な執事に呼び止められる。

「ラッド様、そちらは使用人の席でございます。どうぞ、中へお入り下さい」

老執事は律儀な事に、馬車の扉を押さえたまま立っていた。

仕方なく、私は馬車のステップに足をかけて中を恐る恐る覗いて見る。

中には血色の無い肌に小ぶりで形の良い唇が薄闇に浮かんでいたが、それ以外にも変化が見られた。

私が駅から伯爵の私邸、更に此処に来るまでの間、この馬車の中は爽やかなレモンの香りで占められていた。

同じ柑橘類とはいえ、今はシトラスの香りがくどくない程度に漂

っている。

しかし、女性であるならば、もう少しそれらしい格好があるように思えてしまう。

この異邦人は身体をすっぽり包むようなブラックコートを着込み、しかし帽子を持っではいけないようであった。

「どうかしたかね？早く入るといい。そこで止まっでは御者が困ってしまう」

そう告げるも、未だ動かずに私が訝しげに自分を見つめていることに気づくと、その語気は強まる。

「この服装の事ならあまり気にしないでもらいたい。僕が男性だと思えば何の問題は無いはずだ。それとも、時代遅れの『愚かであれ少女たれ』かね？実にくだらない」

「いえ、何も問題などはないのです。そうではなくて、貴方が私の雇い人になるといふ事を貴方の雇い人に聞いたものですので」
返事代わりに気だるくうなずかれる。

「マーガレット・レイバンド。それが僕の名前だ。人前ではレイバンド様。そうでない時は、マリーと呼んでも怒らない」

そう付け足した終わると同時に、馬車が動き始める。

セント・ポール大聖堂の方角ではなく、おそらく北であろう方角に向かって。

マリーの表情には何の変化も無いので、北に彼女の住まいがあるということなのだろう。

窓から暗い街を見つめながら、ふと思ひ出す。

「ネッド・ラッドです。未永くよろしく願いいたします」

そういえば、名乗ってすらいなかったのだ。

名前を抱く腕

「君の名前のエドワードだが、それは黒太子から取ったのだろうか？」

馬車の車輪がたてる軋むような音だけが長い間響いて、道路が舗装されていない所まで進んだ辺りで、低い声がぼそりと聞こえた。陽の下で聞くには陰気すぎて、例えば暗幕の下でも外では聞こえない。

暗がりでも、しかも部屋の中で聞くにはとても良い声であると思う。「良くお分かりになりましたね。ご名答です。では、マリーはどんなことから取られたのでしょうか？」

黒太子のエドワード、このとても趣味の悪いセンスで私にエドワードと名づけたのは私の母である。

その母に拾われたという言葉を用いるならば、どこのマーガレットまでも予想する事はさして難しい事ではない。

「マーガレット・オブ・アンジュー。この国をかつて内戦に追い込んだ異邦人から取られた名前だよ。良い趣味だとは思わないか？」そう愉快そうにおどけて告げるマリーに目だけで返事をしたが、如何せん暗いので届いたかどうかは分からない。

黒太子に、アンジューの姫君となると母は英国の株を徹底的に貶めようとでも考えていたのだろうか。

父がアイリッシュであった母は欧州全土に起こった、特にアイルランドでのジャガイモ飢饉に非常に心を痛め、ピール内閣の無能さや弱腰を非難し続けていた。

また、小説家上がりのユダヤ人も彼女の舌鋒の餌食とし、同じ様にアイルランド人の足並みの余りの不揃いさに絶望し続けていた。母は年を経ると共に政治的な批判心を滾らせていたのだが、それは決して表に出ることは無かった。

彼女はフローラ・トリスタンには成り得なかった。

かといって、目の前にいる男装のマリーの教育者というわけでもなく、彼女の母にしか成り得なかったのだらう。

「名前を貰って嬉しいのは、その人が好きだということ。そう私に教えてくれた人がいました。きつとマリーも良く知っている人と思います、その人が好きでしたか？」

私の母は好かれるか、嫌われるかの人であつた。

嫌われてさえ魅力が尽きない性格の持ち主であつたことが、良かったのかどうかは本人にしか分からず、その本人はアイルランドの土で眠っている。

「好きだつたというよりも、ソフィーは僕の母だよ。背負いきれない事を全部押し付けられて、それで娘だと言われた時はさすがに怒つたけれど。それでもソフィーは優しい母親であつたと今では思っている」

薄明かりに目が慣れて、マリーの唇で言葉が紡がれるのに、少しだけ見惚れてしまう。

こういう色気を母は多分に持つていて、この女性にも妙に艶めかしい雰囲気が伝染したのかもしれない。

「なるほど、確かに似通っています。けれど、押し付けられても優しいとは異な事です。飼い殺しにされてまで、感謝することはないのでは？」

マリーが答える間、ずっとその唇の動きを見つめていた。

もしかしたらだが、心から安堵した言葉を生み出すときには、この唇は色気を失っている。

代わりに乳臭さを感じる、気がしてしまう。

「時代遅れの考え方だよ。自分で止む無く選択するよりも、誰かに決めさせられたと考える方が楽だという。これからは自由の時代だというのにな」

発熱

舗装されていない道を車輪が進むこと、ほぼ二時間、周りは既に緩やかな丘が広がる田園地帯になっていた。

牧歌的風景と言っても差支えが無いほど強制されることの無い風景が広がっている。

猫の細目の様な月に届きそうな丘には囲い込むための柵が、所々には林があり、音からは小川が幾らか流れていることが察せられる。一時間ほど馬車らしくないほどの速度で進んでいたのは、つまり此処を目指していたからで、目の前に取って付けられた様に建っている屋敷を除いては周辺に他の家屋を見つけることは出来なかった。足弱に取ってはこの環境は軟禁状態とさして変わらないのかもしれない。

それに、屋敷が一棟、そこに建っているだけで厩舎も倉庫も無いということ、この屋敷とロンドンを繋ぐ手段は老執事と馬車だけだと考えても良いのだろう。

馬車を玄関の前に寄せて、私たちを外に出すや老執事は明日の夕刻に迎えに来ると言い残し、寸刻と待たずにロンドン指して帰っていった。

その際、馬車の後部に設えられた座席に馬丁と老執事がしっかりと間を空けて座っていた。

階下の最上位と屋敷の内にすら居られない馬丁が同じ席に大人しく座っているだけでも充分平和的な光景だと思ふべきか。

鍵穴に差し込む音、鍵を回す音、扉を開ける音。

続いてアリックスが寝起きにいつも立てる細い鳴き声を上げたので、後ろから叱るような口調の言葉が届いた。

「黙れ」

短く呟いただけで、片側だけ扉を小さく開けて屋敷へと入ってい

く。

早足になって扉に寄ると、女主人がピッタリと扉に寄り添っていた。

「お前は私の使用人。だが、鍵は常に私が持っている。これからも手放すつもりは無い。つまり、私が扉を開けたら走れ」

一つ、首肯で返事とし、屋敷のうちへと足を運ぶ。

扉の外は夜であり、内はまごうことなき闇であった。

蠟燭に火が灯っていないのは当然のこと、この屋敷の窓には恐らく全て暗幕がかかっていたのだから。

「陰気ですね。月の光程度なら眩しくはないでしょう」

「慣れることだ」

質問された事など意に介さないようにマリーが言葉を続ける。

「お前の部屋は無い。二階の倉庫に幾つかベッドが転がっているはず、それを使え」

それだけ無関心で、左に、恐らく扉へと爪先を四十五度捻るように向けた。

「お前は二階。階段は見えるだろう。部屋が三部屋あるから、どれを使っても構わない」

二言三言と言わずに文句も質問も抱えている。少しでも届けばよいと右腕を伸ばしてみた時に、またアリックスが鳴いた。

加えて、伸ばした肘に鈍い痛みを感じた。

ほんのりと体が上気しているのも感じられる。

旅の疲れ、あるいは人と話しすぎたのかもしれない。

熱に因る溜息をつきながら、階段をゆっくりと登っていった。

肘は勿論、腰や肩にも熱を感じながら。

女主人

2月22日付けの手紙が今更届いていた。

いくらお国仕事であろうとも7日以上空くのは感心出来ないものだ。

送り主はパリのバステューの近くに住んでいて、名前がアンナ・クロードヴィス。

生きていたことに何より驚きを感じるが、囲われた女の身分で主人の姓を名乗る図々しさは変わらず、馬鹿で無教養のままだ。

だのに、主人に尻尾を振るのだけは得意で政治思想だかなんだかを神妙にふむふむと聞いている内に感化されてしまったと見える。手紙のうちには、やれ社会思想だ市民の権利だ云々と喧しく並べ立ててあるのだから。

パリでは夜毎に宴会名義で革命のための集会を開いていたところ22日にお上から突然の停止命令が来たのだ、だから私も只の女ではあるが声を張り上げるくらいは、座り込んで抗議するくらいならば可能なのだと、何とも勇壮な事も書いてある。

アンナからの手紙はたったの半年振りなのに、愛人生活も決して風のように幸せになれるわけではないのか、自分とは違う方法を選んだアンナが幸せになっているかどうか少しは気にしていたというのに。

半年で自分の服は大体4倍になったが、向こうは精々二倍程度であらう。

常連には違う服で対応せねばならぬ上に、季節を8つに分けて衣替えもしているのだから何とも贅沢な暮らしをしているのだ、自分は。

全くもって、場末の酒場で男にすり寄る生活や、路地で震えて家に帰れば銅混じりの水を飲む生活、はたまた遠い国で語り合う人も居らずただただ囲われて抱かれるだけの生活よりはマシなのだろう。

けれど、そういう人は自分の好みで服を着るのだろうし自分でパンを買ったりも出来る。

香水をつけずに済む生活を、入浴を拒んでペチコートを穿かずに済む生活があるならば、それはとても幸せなことだと想う。

浅ましいまでに恋焦がれる自分と、きつと失望するであろう先が容易に想像出来る。

破滅願望は願望であるうちでしか楽しくないものだと思えないつもりだ。

宛て アンナ・クロードヴィス様

「君が変わることなく健やかな頭脳を誇っているのを何よりも嬉しく思う。君が向こうに行ってからドーバー海峡を前よりも意識するようになったことを書き記しておく。さて、フランス人のことだから革命を止めるのは不可能だとしても、僕はあの社会主義者、ルイ・ブランもアルベールもフランス人が信用すべきではないと考えている。彼らは社会主義を標榜しているのだ、フランス人の土地を根こそぎ奪う事業をすぐに始めなければ存在価値を失ってしまう。

怒りんぼのフランス人にとって、由々しき事態ではないか。社会主義者に加えて、日和見を決め込んでいた資本家も陣営に引き込むべきではない。市民革命と豪語したのなら全ての資本家から金を差し出させるほどの威容が無くては恥ずべき事であろう。国に楯突くだけが革命ではない、貧しい市民以外の全ての人種よりあらゆる物を取り戻すのを革命と僕は呼びたい。

君が君の考える理想に対して尽力される事を切に願っている。どうせなら、アンナ・クロードヴィスが女ナポレオンと成ってドーバー海峡を渡ってくるのが望ましいのだが。そうして会えたとしたら素敵な事だ。

では、日々の生活に絶望のないことを。」

マーガレット・レイバンド・キール

この内容も逐一確認されて、写しを取られて、個人の文章への陵辱としか言い様の無い行為が繰り広げられるのだろう。

折角良い紙を使って、綺麗に折まで付けたのに、ほとんどがまた無駄になる。

三等紙を大量に持つてこさせて全部内容が無いままに綴っていったとすれば、お抱えの奴等の目を存分にいたぶってやる事も出来るのだから。

今は耐えよう。

近い内に娼婦殺しが現れて、手始めに私の内臓を抉ってくれるかもしれない、たまたま足を滑らせて頭を打つという運命にも恵まれているかもしれない。

だが、その前に伯爵がまた変な召使を送り込んできた。主人に対して少し言葉をかけられただけで礼儀を忘れる馬鹿であるが、送られてきたこと自体に感謝する。

遠くない日に何かが起こる、それはきっと愉快で下らなくて辟易するもので、とても自分を悲しませてくれるであろうから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7731g/>

Old fashion

2010年10月8日22時32分発行